
鍛冶屋の日々

朝来終夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍛冶屋の日々

【Nコード】

N1101X

【作者名】

朝来終夜

【あらすじ】

『狼と香辛料』と『聖剣の刀鍛冶』の世界を足して二で割ってから魔法要素を織り込んだ世界。そこに住む鍛冶屋と愉快な仲間達によるドタバタ（になるのかな？）娯楽二次小説。現在週1で投稿しています。

世界観および設定もしくは登場人物（前書き）

ネタばれあり。いやな人は読まないこと推奨。

世界観および設定もしくは登場人物

登場人物

メルト＝ブレイス

鍛冶屋を営む無愛想な青年。生活用品から武器防具まで、一通り作れる。特に刀剣類に関しては右に出る者がほとんどいない程。最初は独り暮らしで誰も寄せ付けなかったが、いつの間にやら周りにぎやかになり、溜息を吐かない日がない。

アトラ＝カーディナル

かつて滅びた北の町、ヨイツの出身者。行く当てもなく、ただぶらぶらと旅を続けていたが、メルトに出会い、共に生活することに。外見は背中を覆う程の赤色の髪を持った妙齡の美女だが、その正体は『赤き牙』の異名を持つ狼の化身。（本人は嫌いだが）唐辛子が生き血を代償に狼になったり人になったりできる。趣味はメルトをからかう事。

シャーリー＝ロア

常に黒服を身につけている十代半ばくらいの外見の少女。普段は無口、と言うよりは物静かだが、アトラとはよく喋っている。その正体は影を司る魔剣型の悪魔。行く当てもなかったのだがアトラと意気投合した為、メルトの処に転がりこんだ。魔剣に姿を変える（元に戻る）には以下の言葉を唱えなければならない。

『眠りを解け、影を地に打ち、楔をこの身に——神を殺せ』

エレン＝アセスルファム

セミロングの青髪白眼の女性。厚手のワンピースと上着を羽織った服装をしている。父親が悪魔契約に染まり、メルトの家族を殺したことで、常に食事を用意して少しでも償いになればと想っているが、その想いは未だに届かない。香辛料を専門に扱っている商店で働いている。

セリア＝マートン

エレンの親友。オレンジのショートヘアーで、エレンと同年代。想いが報われないエレンを気遣うが、変化の無い日々にはきもきしている。工房街にある衣料職人の弟子兼助手として働き、賃金の一部を実家に納めている。

エメラルダートールギス

メイ・ザ・スライサー

酒場の女将。かつては首切りの五月と呼ばれ、恐れられる程の賞金稼ぎだったが、酒場の主人に一目惚れし、現在に至る。今でも実力は衰えておらず、酒場で暴れようものなら、愛用のバトルアックスを振りかぶって襲い掛かってくる。実力は狼に戻ったアトラ以上。

通貨

クリスト金貨

ブローチ銀貨 100枚で金貨1枚と同価値になる

レジスト銅貨 100枚で銀貨1枚と同価値に、10000枚で金貨1枚と同価値になる

銅貨一枚は日本円で100円位の価値がある。

国名・地名

ロックブラスト

メルト達が住む交易都市、メルトはそこで工房『マテリアル』を営んでいる。

ヨイツ

アトラの故郷。かつて、月を狩る熊に滅ぼされた。

ミストウオール

温泉街。シャーリーはメルト達と出会うまで、そこで眠っていた。ガニメデ鉱山

ロックブラストが保有している鉱山。鉄の他にも様々な金属がとれる。

クローディアの森

ロックブラストより東にある森。人外がうろついているが、良質

な材木やレモンが採れる。

鉱物

基本鉱物

鉄、銅、金、銀、石炭、硫黄など。

魔道鉱物

火、水、土、風の魔力結晶。ミスリル。電磁鉄。黒銀。

プロローグ

クローディアの森。

人外と呼ばれる、人に近い内蔵器官を持ちながら、人の理から外れた、人に害なす存在が棲息している野生の森。普段は誰も近づかない森の中を、一人の青年が荷馬車に乗って進んでいた。

所々錆び付いたかのような銀髪を肩の辺りで縛り、石炭や木炭等の炭素の粉末で汚れた作業着とマントを身に付け、腰掛けた荷馬車の御者台の横には一本のロングソードが立て掛けられていた。

「……そろそろか」

呟く青年の視界には、一本のレモンの木が成っていた。

木の傍に荷馬車を止め、地に降り立つと青年は手慣れた感じで籠を取り、木からレモンをもごうと近付いて始めて気づく。

「……ん？」

木の傍に一人の女性が居たのだ。

赤い髪を伸ばし、茶色を基準にした旅装に身を包んだ、妙齡の美女である。

街ならともかく、ここは森、しかも人外が蔓延るクローディアの森なのだ。普通ならば行き倒れが関の山のはず。なのにその美女はレモンの木の根元に座り込んで、すやすやと昼寝をしていたのだ。

絵にはなる。だがここは危険の多い森の中だし、何よりも頭と尻に生えている獣の耳と尻尾はどう説明すればいい？

「……ん？」

こちらの気配に気づいたのだろうか、彼女はゆっくりと眼を開き、首を回して顔を青年に向けてきた。……どこか、面白そうな顔を。

「……ふむ」

彼女はただ楽しそうに微笑む。まるで今、青年が目の前に居ても何の問題もないかのように。

「して、ぬしはわっちを見て、どう思いかや？」

彼女、いや、人の姿をした何かが問い掛けてくる。誰かとも、何をしに来たのかも問わずに、ただ自分と言う存在をどう受け止めるかを。

立ち上がり、自らの耳と尻尾を見せびらかしながら笑い掛ける妙齢の美女に、青年は答える。

「……どうでもいい」

その言葉に、獣耳の女性は足を滑らせてしまい、地面に寝転がった。今まで生きてきて、はつきりとどうでもいい、と言われたのだ。彼女の心の中は驚きで満ちていた。

「……ぬしはわっちが恐くないのかや？」

問いかけるも当の青年は、籠を横に置いて黙々とレモンをむしり取っていく。

「……正直どうでもいい、それともお前は」

俺の敵か？ そう青年は聞き返してくる。

「……くふ、くふふふ」

獣耳の美女は笑う。寝転がったまま、その顔に似合うように、静かに笑い続ける。

言葉の意味を理解したから、自分に関心が向いてないことを理解したから、青年が無関心な理由を理解したから。

「つまりぬしは、自分以外の人間、いや生物全般に対して興味がないのじゃろう。自らに牙を剥かれない限り」

「……で、どうなんだよ？」

籠が半分くらいレモンで埋まると、青年は女性に顔を向ける。

「……安心せい」

身体を揺らし、女性は反動をつけて起き上がった。

「わっちは自衛と狩り以外に牙を剥けぬ。ぬしも似たような口ならば、互いに牙を剥く理由もあるまいて」

「……ならいい」

青年は女性に背を向け、レモンの収集を再開する。しかし視界の端に映った一本の腕に、その作業は中断させられた。

「何だ？」

「ぬし、これが終われば街へ行くのかや？」

横に立っていた女性に、青年は顔を向ける。

「行くというか、帰るんだよ。そこで暮らしてるから」

「ならばわっちも連れてつてくりやれ」

青年は顔を背けた。だが背中越しに应える。

「……だったら手伝え」

「もちろんじゃとも。……ああ、そうそう」

その言葉の後に、女性は名乗る。

「わっちはアトラ。かつては『赤き牙』と呼ばれた狼の化身じゃ」

してぬしは？　と言つかのように、視線が向けられる。その視線に耐えられずに、青年は獣耳の女性に、アトラに背を向けたまま名乗った。

「……メルトリブレイス。ロックブラストという街に住む、鍛冶職人だ」

第1話

「なんか食い物はないかや？」

「……荷馬車にある干し肉でも食ってろ」

レモンを採り終えた二人は森を出て、街へと続く馬車道を荷馬車で進んでいた。

御者台にメルトが座り、荷台にはアトラが寝転がっている。アトラは耳と鼻を動かしながら、レモン籠と煤けた箱の隙間にある袋から干し肉を取り出して口に咥えた。

「良い肉じゃのう、本当の良いのかや？」

「そこまで金掛けてねえよ。いざとなれば非常食にも、売って金にもできるしな」

アトラの声にも関心を持たずに、メルトはただ前を見て荷馬車を進めていく。

「そういえばぬしは鍛冶職人じゃったのう。金回りを見るに、腕は良い方みたいじゃが」

「ああ……特に刀剣類人殺しの道具に関してはな」

その言葉に一瞬、アトラの眼が細長くなった。寝転がりながらも、その視線は御者台の鍛冶職人に向けられる。

「ぬし、人を殺したことが——」

「ある。ある意味では」

アトラの言葉を切るも、メルトの眼は前を向いたまま、微動だにしない。

「俺の武器はかなり有能でな、使い手によっては敵無しなんだとさ」
荷馬車は進む。荷台にアトラとレモン入りの籠、それに鉄鉱石と石炭を詰めた木箱を載せて。

「しかしぬしが人を殺したわけではないのじゃろ？」

「それでも俺が人殺しの共犯者であることに変わりはない。……まあ、それでも」

俺には関係ないがな、と呟いて、メルトは黙り込む。

アトラは考え込むように空を見つめていたが、ふと起き上がり、御者台にある剣に眼を向けた。

「その剣もぬしが作ったのかや？」

「……ああ、無銘だがな」

そう言つてメルトは、剣を手に取りアトラに背中越しにつき出した。

「見るか？」

「……いいのかや？」

アトラはどこか楽しげに問いかける。

「それで切り掛かるかも知らんぞ？」

「んなもんなくても俺に襲い掛かれるだろ？ 『赤き牙』殿」

「……ふふん。まあ」

何処か機嫌を良くしたアトラは立ち上がつて剣を受け取り、鞘から抜き放つた。

「そう言えばお前、剣の扱いに慣れてるのか？」

「そこそこ扱える。それでも長い旅を経験したからの、学ぶことは多かった。……ホウ」

アトラは剣身を見つめ、感心していた。

「鑄型製造ではなく、折り返し鍛錬により生成されたモノかや？」

久しぶりに見たのう」

「そこまで分かるのか？」

その言葉に、メルトは思わず後ろを振り返つた。

最近の武器製造は、鑄型に鉄を流し込んで生成する鑄型製造が主流である。昔は鉄を熱して打ち、手間暇をかけて生成する折り返し鍛錬が主流だったが、70年前に起きた世界戦争の影響で、武器を揃える為だけに、質よりも量の鑄型製造に切り替え、折り返し鍛錬の生成方法は伝承されずに廃れていったのだ。

「だが、俺以外にその製造法を知る者は近くに居なかった。他の国に、その技術を伝承した奴が居るのか？」

「そういう意味ではありません。わっちが見たのは戦争が起きる前の話じゃ」

その言葉に、メルトの顔が一瞬驚きに歪んだ。

「お前、いくつだよ？」

ビュン！ この音が風を切った時に起こる音だと、メルトは直感で感じた。

「ぬしよ……女性に年を聞くものではありません」

「分かったから剣を下せ」

アトラはメルトの首筋に突き付けていた剣を引き、慣れた手つきで鞘に納めた。メルトの顔に汗が流れたのは、幻覚の類ではないだろう。

「どこがそこそこ扱える、だよ？ かなりの腕前じゃねえか」

「長い旅を経験したと言ったじゃろ。……とは言っても、わっちにも正確には分かりません。分かっているのは300年前、ヨイツというわっちの故郷が滅ぶよりも前に生まれたこと位じゃろうて」

そう言っ、アトラは剣をメルトに突き出し、荷台に腰かけた。

剣を受け取り、メルトはヨイツという言葉を、頭の中で反芻している。

「ヨイツ？ 確か月を狩る熊、とか言うどでかい熊が滅ぼした古い地名がそんなだったような」

「それで間違いありません。わっちは偶々、連れのホ口という狼が旅に出るので、その見送りで離れておったんじゃが、帰った時には全部終わっておった」

「そうか……」

メルトは黙り込む。下手に声を掛けない方がいいと分かっているから。何故なら自分も……。

「それよりもぬし」

「なんだ？」

そう言っアトラを見るも、彼女の瞳は馬車道の横、森が途切れ、て広がっている草原の果てに映る黒い点に向けられていた。

「……盗賊じゃ」

「ここいらにも居たんだな。……規模は？」

「ただのゴロツキが10人程、ぐらいかや」

「……そうか」

荷馬車を止め、二人は地面に降り立った。

「荷台の底に隠れてろ。もしくはそこに隠してる武器を使え」

「では借りるかの。……ところでぬし」

なんだ？ と呟きながら、メルトは先程のロングソードを鞘から引き抜いた。

「剣は得意なのかや？」

「……そこそこだ」

荷馬車の底にもぐりこんでいる狼の化身を尻目に、鍛冶職人は盗賊に向けて剣を構えた。

第2話

メルトとアトラは背中合わせに剣を構え、周りを囲んでいる盗賊達に目を走らせた。メルトはロングソードを、アトラは荷馬車の底に隠されていたゆるやかな反りを描く剣、刀を鞘に入れたまま持っている。

「……おいおいお二人さん」

盗賊の輪の中に、むさ苦しい髭を拵えた巨漢が、ボロボロのツヴアイハンダー（持ち手が二つある大剣の一種）を片手にぶら下げて割り込んできた。おそらく親玉だろう。周りの盗賊達がこぞって道を開けた。

「俺達はお前さん達の持つてるもん全部寄こしやあ、何もしないことを誇りに思っている。剣を下して大人しく身包み剥がれて大人しくしてな」

「……ホウ」

（おい、アトラ）

（なんじゃ？）

ありきたりなセリフに感心しているアトラの耳に、メルトの小声が挟まれた。

（こいつらビビらないんだが、お前耳と尻尾どうした？）

（そのことかや？ 面倒だから隠した。一日位なら隠せるでありんすから）

（……そうかい）

メルトは溜め息を吐くと、剣の柄を強く握った。

「生憎とこちらの誇りが弱肉強食でな。……力づくで奪いやがれ！」
そして切り合いが始まる。親玉を始め、下っ端共がこぞって二人に殺到しだした。メルトとアトラは背中合わせのまま、それぞれの得物で応戦していく。アトラは最初に掛かって来た下っ端の一人を、
「——フッ」

鞘から高速で抜き放った刀の刀身で切り伏せる。居合切りをかましてから二人目との応戦に入った。メルトは抜き身の剣を次々と襲い掛かってくる下っ端に向けて振り降ろしていき、次第に数は減っていった。

「……やるじゃねえか」

5人目を切り伏せたところで、親玉がメルトの前に現れて、ツヴァイハンダーを構えて立つ。それにメルトも、剣を構え直して対峙する。下っ端の残りはアトラに任せても問題ないと判断したためである。実際、下っ端の残りは二人程で、アトラの顔はまだ余裕そうである。

「こちとらこれでおまんま食ってた。悪いが痛い目を見てもらうぞ」

「ようやく腰を上げたのか。……遅すぎだろうが」

「ふん、これを見てもそんな減らず口が叩けるのか？」

言うや、盗賊共の親玉は懷から丸められた羊皮紙を取り出し、叫んだ。

「サラマンドラー！」

その言葉と共に、奴の右腕から炎が捲き上がり、龍の形をとって親玉の剣に巻き付いた。

「ちっ、巻物契約か。……厄介だな」

巻物契約。巻物スクロールと呼ばれる、羊皮紙状の契約書に自らの血で名を記すと、巻物に宿っている力が振える。巻物は千差万別だが、全てが絶対的な力を持つているわけではなく、中には『水を浄化する』、『明かりを灯す』から『禿げにならない』まで、色々と存在する。が、何故この巻物が生まれたのか、どうやって製造するのかは判明されていない。噂では異世界から来た技術が巻物と化したとか言われている。

「そうさ、俺こそ煉獄の盗賊大将、ガ——」

「だがお前がアホで助かったよ！ 求めるは雷鳴>>>」

瞬間、メルトは右手を突き出し、手の平を親玉に向ける。手の平

には光が浮かび、それが高速で魔方陣を書き上げていく。

「お前、それは――」

「稲光いづち！！」

巨漢の言葉を聞かず、メルトは叫んだ。自らが契約した巻物の起リガ動呪文を。

魔方陣から雷が飛び、親玉の手にある巻物を貫いた。

「なっ！？ ガアア――」

巻物が貫かれると、制御を失った炎が親玉の体を炙った。慌てて消すも、その隙にメルトが懷に飛び込んで、一太刀で切り伏せる。

こうして名も無き盗賊の親玉は倒れ伏した。

「巻物が手元になくても契約は使える。……持ち歩いてる時点で間抜けなんだよ、お前は」

剣身に着いた血糊を払い、鞘に納める頃にはアトラが近寄って来た。もう終ったのだらう、刀身を布切れで拭いながら声を掛けてくる。

「ぬし、巻物を持つとったのかや？」

「昔貰った。……使ったのは久しぶりだがな」

それだけ言くと、メルトは荷馬車に向けて歩き出す。その背中にアトラの声がぶつかる。

「盗賊はほつとくのか？ ぬしよ」

「興味ない。……捨て置け」

「……ホントにぬしは面白い」

布切れを捨て、刀を鞘に納めると、アトラはメルトの背中を追いかけた。

「刀、この後も借りていいかのう？」

「剣もあつたろ？ 刀でいいのか？」

「……わうちには刀の方が性に合う」

メルトは御者台に、アトラは荷台に寝転がり、荷馬車は進みだす。血に倒れ伏した盗賊達を尻目に。

少し経ち、アトラは干し肉を啜えながらばやいた。

「……街まであとどの位かのう」

「もう少しだな。……見えてきたぞ」

「どれどれ？」

アトラは起き上がり、メルトの背中越しに街を見た。

ロックブラスト。五つの身分と絶対的な法の下、統治された民主国家。治安もよく、戦争を仕掛けるような隣国は存在しない。人によつては街を覆う岩壁を頼もしき盾とも、堅固な牢獄とも考える。

「中々発達した街みたいじゃのう」

「……退屈な街さ」

荷馬車は進み、入国所に近づいていく。

「ああ、耳と尻尾は出しても大丈夫だぞ。獣人も結構住んでるからな」

獣人。人外とは違う、人並みの知能と文明を持つ種族。一部の人間は人外と同じように恐れ慄き、それ以外では人とは違う技術を持つ彼らと共存していく者達もいる。この街もその内の一つである。

「ぬし。……驚かなかった理由はそれかや？」

「そんなところだ。……ロックブラストへようこそ」

裏話を聞いて不貞腐れているであろうアトラに、メルトは背中越しにやる気のない声で、歓迎の挨拶をした。

第3話

「手続きはこれで結構です。ロックブラストへようこそ」

入国所での手続きを終えた二人は、そのまま門をくぐり、街中の馬車道を荷馬車で乗り進めていく。馬車道は大小様々な商店に挟まれ、商人や買い物客などが右へ左への大騒ぎだった。

「ぬしは鍛冶職人じゃろ？ 工房に所属しとるのかや？」

「というか、一応自分の工房を持っている。自宅との兼用だがな」
などという会話も、ある程度声を張り上げないと周りの啖呵に掻き消される位だ。

実際、アトラは御者台に居るメルトの隣に腰掛けて、ようやく会話ができる位なのだから。

「しかし賑やかじゃのう。ここはいつもこうなのかや？」

「ああ、お陰で行き来するのにも一苦労だ」

賑やかに騒ぐ国民達を見つつ、二人を乗せた荷馬車は遅々としながらも、歩みを止めない。

「これから行くのはぬしの家かや？」

「いや、その前に商会に行く」

「商会？」

アトラは首を傾げ、メルトにどんな用で行くのかと、目で問いかける。

「実はレモンの収穫は、今から行く商会からの頼まれごとでな。最近南との行商が途絶えたお陰でレモンが入手困難になってるんだよ」

「南かや？ そういえば前に立ち寄った街でも南で不穏な噂が流れてると聞いたのう。たしか盗賊よりも性質の悪い集団が現れたとか」

「ああ、なんでも悪魔契約を信仰している新興宗教だとか、な」

悪魔契約。『死言』という誰の心臓にも刻まれている言葉を引き金に、悪魔を生み出す禁忌の呪文。自らの心臓に刻まれている死言しか読むことはできない為、生きたまま胸を切り開くしか見ること

はできない。かつてあつた戦争でも、戦力になるという理由だけで兵士達に唱えることを強要したという。今では各国で禁じられている程だ。

「悪魔契約か、やな言葉じゃ」

「そういえば、お前は戦争経験者だっ——」

「メルトさん!？」

メルトの言葉を遮るように、彼と同年代位の青髪の女性が声を掛けてきた。その言葉は騒音の中でも聞き取れるほどに高く、澄んでいた。

「メルトさん！ お客さんですか！？ だったら今日はその分も作って——」

「お前は戦争経験者だったのか？」

メルトは彼女の言葉を無視した。……いや、実際に聞こえてないと言つても差支えない位の振舞いだった。

「……正確には遠目で見とつたんじゃ。次々と生み出される悪魔達を尻目に、関係ない者達を逃がすのを手伝つてたからのう」

だからアトラも、それに合わせるしかなかった。誰にも触れて欲しくない問題というものはある。

「メルトさん！ 今日の——」

「流石に参加しなかったか？ 実際、友好的な獣人すらにも強要してたらしいからな」

「献立は——」

「出ておつたが、悪魔契約と聞いたらすぐに逃げた。傭兵の賃金は得られなかったが、使い捨てにされるよりかはましじゃ」

女性を無視し、メルトとアトラは話し込む。そして荷馬車は人混みを掻き分けて行き、とうとう彼女と離れ離れになった。

「今晚もお待ちしてまーす!!」

最後に、力一杯張り上げた声が馬車道に響いたが、当のメルトには聞こえてない。本人の聞く気がないのだ。

「わっちらが向かつておる商会はなんて言つのじゃ？」

「リユミオーネ商会と言う。ここいらでは大御所だな」

アトラも、メルトの雰囲気を感じて、極力青髪的女性については聞かなかった。いや聞けなかった。

「てことは、レモンは高値で売れるのかや？」

「元々刀剣や金物を卸していたからな。結構贋貨にされているから、そこらの商会よりかは高値で引き取って貰える」

だからアトラには、例え長年の経験があっても、女性を話題に乗せることは出来なかった。

「もつとも、だからこそ商会からの頼まれごとを断ることは出来ないんだがな。……と、見えてきた」

近くの商店や商会本部よりも一回り大きい建物の前で、メルトは荷馬車を止めた。

リユミオーネ商会。近隣一体の商取引を担い、成長、発展を遂げた老舗中の老舗。今でも手を広げており、最終的には全ての国に支店を設置してしまうかもしれないと言われている。

「ブレイスさん！」

入口は開いており、そこに控えていた男が近寄り、声を掛けてきた。

「いつもありがとうございます。手前共で頼んだモノは——」

「荷馬車に。今回も高値で引き取って貰いたいのだが？」

「もちろんですとも。ではこのまま奥にお願いします。すぐに馬車持ちが参りますので」

「分かった」

男との会話を終え、二人を乗せた荷馬車は商会の奥、大規模な商取引が行われているひらけた場所に出た。

「ブレイスの旦那！ 御用向きは！？」

ひらけた場所に出るとすぐに、戦士にも見える体格をした偉丈夫が声を掛けてきた。メルトと顔馴染みの馬車持ちである。

「レモンの買い取りだ、デン。何処に行けばいい？」

「じゃああつしが案内しやす。そのまま俺に続いてくだせえ」

デンと呼ばれた偉丈夫は前に出て、荷馬車の先導を始めた。

「しかし旦那。そちらの方はどなたで？」

「帰りに拾った旅人のアトラだ。よもや獣人が怖いと言わんよな？」

「俺にやあ、獣人よりも欲に眼の眩んだ商人の方が怖いね」

「違うない」

軽い世間話をしながら、メルト達は建物の下、行商人達との取引の場に通された。

「……流石に広いのう」

「そりゃあ、天下のリュミオーネ商会だからな。店に出されるモノは大抵取り引きしてる程だぜ」

メルト達は荷馬車を降り、手綱をデンに預けてから荷馬車にもたれ掛かった。デンが手綱を近くの柱に結び、呼び鈴を鳴らす様を眺めていると、奥の方から商会の人間が出てきた。

「ようこそ、メルト・ブレイス様。この度は手間をお掛けしてすみません。当商会の本部長に変わり、お礼申し上げます」

「本部？　と言うことはここはリュミオーネ商会の本店かや？」

「ええ、そうですよ。獣人の御嬢様」

見ず知らずのアトラにも、商会の男は余裕を持って答える。ホント商人は肝が据わってる人間が多いと、メルトは内心で思う。

「では早速、品物の方を」

「ああ。……デン、手伝ってくれ」

「お任せを」

メルトとデンは荷台に乗り、レモンの入った籠を二人掛かりで荷台から下ろし始めた。

第4話

「籠一杯でブローチ銀貨50枚とは……」

「よっぽど深刻のようじゃのう。南との行商が途切れるのは」

リュミオーネ商会との商談を終え、二人は荷馬車に乗りこむや、メルトの工房へと向かっていった。余談だが、銀貨五十枚もあれば一般家庭でそれなりに贅沢な暮らしができる程の額である。むしろ一般人の月収の二倍だ。

「まあ、レモンの木はほとんど南にしかないし、俺達が採ってきたやつも、人外だらけのクローディアの森に辛うじて生えてるモノだしな。……他の入手路そのものが存在しないからなあ」

「現状様々じゃのう」

二人の乗る荷馬車は、商店に挟まれた馬車道から逸れ、職人達が居を構える工房街に入り込んでいく。周りからは煙が漏れ、金属音や不出来な弟子を叱りつける師匠の怒鳴り声が響き渡っている。

少し進み、自宅も兼ねているにしては他よりも大きな工房の前に荷馬車は足を止めた。

「……ここだ」

「『マテリアル』……かや？」

「マテリアル材料から作るんだから、そんなもんだろ」

メルトはアトラに荷馬車を降りるように促すと、馬を工房の横にある厩に向けた。

「そこで待っていてくれ。先に荷馬車を片づけて来る」

「分かった。早くしてくりやれ」

アトラが荷馬車から降りると、メルトは馬を操り、荷馬車を厩へと動かした。

厩に入るや荷台から馬を外し、手綱を近くの柱に括りつけてからメルトは、工房の方へと戻っていく。入口に待たせたアトラに目で促し、共に扉の前に立つ。懷から出した鍵で解錠すると、メルトは扉

を開けた。

「入れ」

「お邪魔しんす」

二人は中に入る。目に映るのは使いこまれた木のテーブルと椅子、食器棚に台所と他の部屋へと続くであろう階段と二つの扉。そして壁に飾ってある一本のロングソードがあるだけの、生活感が薄い場所であった。

「……随分と寂しい所じゃのう」

「俺以外に住んでる奴がいないからな。元の持ち主でもある師匠も、2年前にポツクリ逝ったし」

言うや、メルトは台所にある薬缶を手に持ち、扉の一つに手を掛けた。

「中庭で水を汲んでくる。適当に座っててくれ」

「うむ」

中庭に行くメルトの背中が視界から消えると、アトラは手近な椅子に手を掛け、腰を下ろす。

足を組み、自らの尻尾を手元に置くと、荷物から櫛を取り出して、尻尾を梳き始めた。

「大分からまつとるのお。蚤はいないようじゃが……」

アトラはこれまでも、色々な街を巡って、旅を続けていた。唯行く当てもなく、思い思いに街に行っては村に行き、掘立小屋に住む狩人の手伝いもすれば、傭兵にもなって人を切ったこともある。人よりも長い時を生きてきて、気味悪がられる前にそこを去る。その繰り返しだが、旅となってしまうと既に300年になる。

「時が経つのも、早いもんじゃのう」

それでも受け入れてくれる者はいた。いつの間にか戻って来て、台所で薬缶に火を通してあるメルト然り、200年位前に剣術の手解きをしてくれた師匠然り。

「……ところでアトラ」

「何かや？」

互いに視線を合わせないまま、言葉は紡がれる。

「お前、この街に来て、何がしたいんだ？」

「……ふむ」

部屋の中では、櫛で梳く音と薬缶の沸騰音しか聞こえない、静かな空間と化している。その空間の中、二人は言葉を交わした。

「特にはありません。強いて挙げるならば、この街にしばらく滞在すること位かや？」

「……そうか。泊るところは？」

「宿か、もしくは……ぬしよ、泊めてくりゃれ」

その言葉に、メルトは思わずこけかけた。茶を入れたコップを二つ持ち、片方をテーブルの上に置いて、もう片方を口に付ける。

「お前な……他に住んでる奴がいないんだぞ、襲われてもいいのか？」

「ぬしはそういう人間じゃありません。それに、その時は喰らうだけじゃ」

「……おお怖」

肩を竦めると、メルトはコップをテーブルに置いて、台所横の壁のフックに掛かってる鍵の一本を手についた。

「2階の客間でいいなら使え。掃除はしてないから途轍もなく埃だらけだぞ」

「……ぬしよ。それが客人に対する態度かや？」

「図々しい奴にはこれくらいで丁度いいんだよ。泊めてやるだけ感謝しろ」

そう言ってアトラに鍵を投げ渡すと、メルトは扉の一つ、玄関や中庭に通じている扉とは別の、部屋にある最後の一つに手を掛けた。扉の奥は工房になっていくらしく、鉄の匂いが充満している。

「荷馬車の荷物降ろしてくるから、その間に客間の片付けでもしてくれ」

「……分かった。片づけときんす」

工房と厩は繋がってるらしく、メルトはそのまま工房スペースに

入って行った。アトラは櫛を仕舞うと、旅の荷物を手に持ち、立ち上がって階段を上って行った。2階に着いてすぐ横に扉があり、鍵を指してみるとピツタリ合った。

「……ここかや？」

扉を開け、メルトの目には埃が映っていた。そう表現できる程に、この部屋は埃が充満している。しかも大量に。

「……掃除するかのう」

荷物を部屋の外に置くと、廊下に立てかけてあった簞やハタキ、チリトリや雑巾入りのバケツを持ち、埃まみれの部屋に乗り込んだ。

「……やってるなー」

荷馬車から鉋石入りの煤けた箱を抱えて工房に運ぶ傍ら、上の方からどたばたと埃取りをしている狼の化身の足音が、下にまで響いていた。その音を聞きながら、メルトは運び込んだ箱の蓋を開け、中の鉋物を工房の鉋物入れに移していく。

「……しかしあいつが住むのか」

別に誰であろうとも変わりないのだが、メルトにとって、“誰かと共に住む”ことは久しぶりであると同時に、一種の不安がよぎるのである。

ふと視界の端に、花の模様が浮かんた。そこにはかつて自分の師匠が彫った花のレリーフが、立て掛けられた板に刻まれている。花言葉は——『刹那の別れ』

第5話

「……終わったのか？」

「……………見ての通りじゃ」

鉱物を片づけ終えたメルトは、二階の客間を掃除していたアトラの様子を見に来たが、客間の床には獣人の絨毯が敷かれていた。いや、そこらの獣人の絨毯よりもある意味贅沢かもしれない。

掃除による疲労でへばっているアトラに、メルトは声を掛ける。

「もう日も暮れるし、外へ飯食いに行くぞ」

「……………何処へじゃ？」

アトラの脳裏に一瞬、街で見かけた青髪の女性の顔が浮かんだが、メルトの答えはその女性ではない。

「行きつけの酒場だ。支度しろ」

「……………少し待っててくりやれ」

それを聞いたメルトは、背を向けて一階に降りて行った。階段を降りる足音を耳にしながら、アトラは立ち上がって服に着いた埃を叩き落とす。一通り済むと、掃除の前に外しておいた刀を腰に差し、メルトに続いて階段へと向かう。

「そこにはうまい飯はあるのかや？」

「あるぞ。特に肉がうまい」

「それは良いことを聞いた」

二人は肩を並べ、夕暮れの街を闊歩しながらメルト御用達の酒場へと向かっていた。

周りには人間だけでなく獣人も徘徊し、中には種族が違うにも関わらず、肩を組んで騒いでいる。

「しかしこの街は賑やかじゃのう」

「そりゃあ、人種も種族もごちゃまぜな街だからな。」

二人が角を曲がると、少し古びている酒場が見えてきた。

「あそこかや？」

「ああ。面倒事はご法度だが、飯も酒もうまいぞ。代金も安いし」
「なら奢ってくりやれ。レモンで稼いだ金があるじゃろ？」

メルトは片手を振りつついなしながら、アトラを連れて酒場の戸を開けた。開けた途端、二人の耳には酒場特有の騒々しさが響き渡る。アトラは狼の化身だから耳が良く、軽く身を竦ませたが、メルトは意に介さずに慣れた動きで奥へと潜り込む。

アトラが後に続くと、メルトはカウンターの席に腰掛けて隣の席を示している。

「耳が良すぎて困りんす」

「そのうち耳の方が慣れる」

アトラが隣に腰掛けるのを見るや、メルトはカウンターの奥に居る恰幅の中年女性に声を掛けた。

「女将。いつもの二人分」

「あいよ！……おやまあ！」

近づいてきた女将は、アトラを見るなりメルトにからかいの声を掛ける。

「なんだい！ あんたとうとう女作ったのかい！」

「ただの居候。レモン採りの時に拾った」

「……ぬしよ。もう少し言い方があるじゃろ」

「冗談をどうでもよさげに返すメルトに呆れつつも、アトラは女将に自己紹介をする。

「アトラと申す。しばらくこの街に厄介になるつもりじゃ」

「私はエメラルダ。この酒場の女将さ。まあよろしく」

互いに名乗り終え、エメラルダは葡萄酒の入ったジョッキを二つ置くと料理を取りに奥に引っ込んだ。

「にしても、ぬし女つ気がなかったのかや？」

「作る暇も機会もねえんだよ。……興味もないがな」

そう言うや、メルトは肩を竦めてジョッキの一つを持ち上げた。ぶどう酒に口を付けつつ、メルトは横目でアトラの方を見る。

「……酒は飲めないのか？」

「……いや」

声を掛けられたアトラは、横に一回、顔を振るとジョッキを手に取る。

「考えごとをしていただけでありんす」

二人は葡萄酒を黙々と飲み始める。少しして、エメラルダが料理を持ってやってくるのが見えた。

「ほらどんどん食ってくんな」

二人の目の前に山盛りの肉炒めを置くと、女将は他の客相手に接客していた。

メルトとアトラは目の前の肉の山に食いつき、料理を崩しにかかった。

「……ぬしよ」

「なんだ？」

ある程度削れたところで、アトラはメルトに問いかける。

「ぬしに青髪の女の知り合いはおるかや？」

「………いないな」

それを聞いてから、アトラは残りの肉に手を掛ける。

（……やはり何かあるな）

アトラは青髪の女性が気になり、そのことで考え込んでしまった。

二人は食事を終え、メルトは立ち上がるが、アトラは座ったままだった。

「どうした？」

「少し足りんせん、先に帰っててくりやね。わっちはもう少し飲み食いしてから帰りんす」

「そうか、帰ったら戸締りしておけよ」

そう言い残すと、メルトはブローチ銀貨を2、3枚カウンターの上に置いて、店を後にしていった。

「……さて」

アトラはメルトが帰ったことを確認すると、エメラルダを呼び寄

せた。

「追加注文かい？ ……あの朴念仁は？」

「先に帰りんす。それよりも……青髪の女を知ってるかや？」
その言葉に女将の顔が陰るのを、アトラは見逃さなかった。

第6話

ロックブラストの居住地区、中級市民領ブロック3。その居住エリアの一角にて、1人の女性が立っていた。

青いセミロングの髪的女性で、その瞳は白く、厚手のワンピースと上着を羽織っている。その女性は何処か儂げな笑みを浮かべていると、オレンジのショートヘアをした、青髪的女性と同一年くらいの女性が近づいてきた。

「エレン！ お腹空いたから何か食べさせて」

「セリア……」

エレンと呼ばれた女性は、声を掛けてきた女性に向けて無理やり笑うと、静かに頷いた。

「うん、来ないみたいだし……今日は3人分作ってあるから、一杯食べてってね」

「3人分って……あー太る予感が——」

「なら1人分、わっちにくれぬかや？」

エレンとセリアは声のする方を向く。そこに居たのは背中を覆う程の赤髪をした、妙齡の美しさを持った獣人の女性だった。

「……メルトの家族の敵？」
かたき

「の、肉親なんだよ。あんたの言ってる子は」

メルトが帰った後、アトラは酒場の女将、エメラルダから馬車道で声を掛けてきた青髪的女性について教えられていた。

「あの子の父親は、悪魔契約に魅入られちまってね。その最初で最後の被害者が、あの朴念仁の家族ってわけさ」

その言葉に、アトラは何処か確信めいた推測が脳裏に浮かんた。
「なるほど。敵になる可能性があるから、あの男は無視を決め込んでおるのかや？」

「そう。あの男、自分に刃を向けてくる相手にはとことん冷たいか

ら、可能性でもいちいち気にしちゃうんだよね」

アトラは追加注文した葡萄酒のジョッキを傾け、口に含みつつ考
える。

「しかしあの女は、何故食事を？」

「ああ、今日も声を掛けてきたのかい」

エメルダは腰に手を当て、呆れつつ答えた。

「あれはあの子なりの謝罪の仕方だよ。本当はあの子の罪じゃない
のにね」

「なるほどのお……さて」

アトラは立ち上がり、代金をカウンターの上に置いた。

「あの女の家がどこか、分かるかや？」

「……どうする気だい？」

エメルダはアトラをにらみつけて来るが、狼の化身はただ静か
に笑って受け流す。

「なに……恩を仇で返すのはわっちの誇りが許さんのでな」

「そうかい。……頼んだよ」

アトラは釣り銭の代わりに家の場所を聞き、酒場を後にした。だ
がカウンターの上面にある銀貨の枚数が、メルトが置いていった数と
は合わなかった。

「じゃあアトラさんは、旅の途中でメルトさんにお会いに？」

「そういうことじゃ。ついでに言えば、今はそやつの工房で厄介に
なっている」

「良く泊まれるわね。あの朴念仁の工房で」

アトラが自己紹介した後、3人はエレンの家に入り、食事を始め
たのだった。ちなみにアトラの胃袋は人間態のままでもかなり大き
く、出された食事も普通に平らげていた。

「ああいう阿呆をからかうのが趣味なものでな」

「……あんたも趣味が悪いね」

「セリアもそういうこと言わないの」

悪態をつくセリアをエレンは諫めているが、アトラは気にせず続ける。

「……それで、ぬし達はあの朴念仁をどうしたいのかや？」

「……それを聞いて——」

「謝罪、です」

セリアが突っかかるうとするも、エレンの独白が覆いかぶさってきた。

「私の父がメルトさんの家族を奪ってしまい、あの人は今は亡き工房の前の持ち主に引き取られました。本来ならあの人は、鉄を鍛冶することも、剣を振ることもなく生きていたはずなんです」

私の父があの人をの人生を狂わせたんです。そうばやいて、エレンは顔を伏せた。

「……ぬしの罪ではなかるうに」

「私も言ってるんだけど、一向に聞いてくれないのよね」

セリアも相槌をうつが、それでもエレンは顔を上げない。

「……それでも、私の家族の罪ですから」

……これは根が深い。アトラは内心ぼやくが、それでもこの娘の考えを変える術を、アトラは知らなかった。

(こつういふのはホ口の役目じゃろうに)

かつて別れた旧友並みの賢さが欲しいと、アトラは初めて願った。

「……わっちはしばらくこの街におる。機会があれば話してみるのが、期待はしないでくりやれ」

「いえ、それは……」

「頼みましようよ。何もしないよりはましだし」

エレンは言い淀むが、セリアはアトラの提案に乗った。

「元々あんなの罪じゃないんだし、あいつだって気にして——」

「それは少し違うのう」

セリアの考え違いをアトラは指摘する。

「あの朴念仁はその娘をを恨んでいるわけではありんせん。自らに害を及ぼすかもしれないと考えているにすぎぬ」

ガタン！ アトラが目を向けると、エレンが立ちあがっているのが視界に映った。

「そんなわけないじゃないですかー！ 私はい——」

「それをあの朴念仁は知りません。聞く耳も持たぬし」

「落ち着きなよエレン。アトラの言う通りなんだから」

セリアはエレンの方に手を掛け、落ち着くように促す。

「……それって、結構根深い？」

「かなり根深い。わっちから見ても、アレは骨じゃ」

席に戻るエレンと入れ替わるように立ち上がり、アトラは近くの壁に立て掛けていた刀を手を取った。

「それでもやるだけはやってみる。……あのままじゃからかいがないからのう」

刀を腰に差し、メルトが置いていった銀貨の1枚をテーブルの上に置いてから外へと続く扉に向かった。

「……お願い、します」

「……うむ」

背中に掛けられた声に応え、アトラは外に出た。

第7話

——明朝。

「ン、ンン……」

二階の奥、自室で寝ていたメルトは目を覚まし、ベッドの上から起き上がった。

「……朝か」

ベッドから出ると、メルトはすぐに着替え、一階へと軽く伸びをしながら降りて行った。台所には誰もいないので、必然的に自分で朝食を用意しなければならない。

「……アトラの奴、まだ寝てるのか？」

昨晚遅く帰って来た客人（？）が寝てるであろう辺りの天井に目を向け、軽く嘆息してから視線を外した。

昨晚、アトラはメルトが起きている内に帰って来たが、帰るや戸締りもせずに二階に上がっていったのだ。よほど疲れていたのか、それともただの食べすぎなのかは分からないが、気にしていても仕方がないので、代わりにメルトが玄関を閉めた。あの狼にまかせたのが間違いだと考えつつ。

「……まあ、ほっときゃいいか」

一瞬で思考をアトラから自らの朝食に切り替え、手早く調理していく。とは言っても、手元にあるのは干し肉などの保存食や台所に残っていた調味料の類しかない。故に出来たのは塩胡椒で味を付けた干し肉炒めだけだったりする。

「何か買おうにも、生ものは置いとけないしな」

一人ごちると皿に肉を盛り、テーブルの上に置いた。ふと飲み水を切らしていたことを思い出し、薬缶と玉鍋を持って中庭に出る。

井戸の前に着くと、薬缶を井戸の淵に置いて、玉鍋に巻いた糸を持って井戸に垂らす。

「——」

祈祷契約。砂鉄の加工物である玉鋼を触媒とした、巻物契約と同じ位に普及している術式で、空気中に含有される霊体を反応させて水の浄化や方角の調査、さらには疾風を巻き起こすなどの様々な奇跡を起こす。

玉鋼から雫が落ち、井戸の水が浄化されると玉鋼を仕舞って水を汲み、一杯になった薬缶を持って台所に戻った。

そしてメルトは、家の中での光景に思わず薬缶を落としそうになった。

「……フウ、うまかったのう」

いつの間にか起きたのか、椅子に座ったアトラがテーブルの上の干し肉炒めを平らげていたのだ。

自分の朝食を取られ、強奪した犯人を睨むと、

「……今度は茶をくれぬかや？」

戯言をほざいてきたので手にある薬缶を投げつけるメルトの顔は、何処までも無表情だったとか。

「……また出かける？」

「ああ、昨夜急に決まっただけ」

投げつけられた薬缶で出来たたんこぶをさすりながら、着替えてきたアトラに声を掛けつつ、メルトは再び作った干し肉炒めを食していた。

「ここに帰ってから手紙が来てな、ミストウォールの武器屋に行かなきゃならなくなった」

「ミストウォール、と言うと……温泉街かや？」

ミストウォール。ロッキブラストより北にある温泉街で、多種多様な効能の温泉が楽しめる、各国の王がよく療養に訪れる、別名『戦争ご法度な街』。

「……で、お前どうする？」

「何がかや？」

椅子に腰掛けつつ、アトラはメルトに聞き返す。

「俺が出かけている間だよ。ついて来て温泉入ってるのか、ここに残って留守番してるのか」

「つまり、ぬしの用事の間だけわっちは別の所におればよいのかや？」

「最低でも、な。……で、どうする？」

「ふむ……」

そこでアトラは思考を巡らしていく。温泉への好奇心から、エレンのことまで、事細やかに。

「いつ出るのかや？ 泊まりで？」

「昼には出る。用事はすぐ終わるが慌てて帰ってくる必要もないし、一泊していくか」

「ならついて行きんす。……その前に」

食べ終わり、皿をテーブルの上に置いたメルトの目の前に、アトラは懷から宝石を取り出して皿の横に置いた。

「宝石を買い取ってくれる所を知らぬかや？ 朝の内に換金してきんす」

「昨日の商会で買い取りやってるが……」

メルトは目を宝石に向け、目算で弾きだした価格に内心驚いていた。

「こんな上等な宝石、何処で手に入れた？」

「旅の間は貨幣がごろごろ変わったからのう、手持ちが通用しない時の為に宝石に変えときんした」

「……まあ、正解だな」

この国やその近隣ではレジスト銅貨、その100倍の価値があるブローチ銀貨、さらに上に銀貨の100倍の価値があるクリスト金貨といった、3種類の貨幣が使われているが、そこから離れた国では別の貨幣が使われ、金や銀の含有量によって価値が変わってくる。その中でも、ロックブラストの3種の貨幣は価値を変えず、常に一定の含有量を有している為に重宝されている。ただし、他国の貨幣とは換金できないことがしばしばあり、換金できるのは一部の両替

商だけである。

「て言うかここで売っちまってるのか？ 価値は不動だが、換金とかの融通はききづらいぞ」

「かまわぬ。他にも宝石はあるし、しばらくここで暮らすのじゃから手持ちは幾らかなくてはのぉ」

そう言っただけで宝石を仕舞い、アトラは立ち上がった。

「では行ってきんす。昼までには戻ってくるから待っててくりやれ？」

「……俺も出るから少し待て」

アトラに続いて立ち上がり、食器類を台所の流しに運んで行きながら、メルトは思いついたように話す。

「なんなら推薦状書いてやろうか。少しは高く買い取ってくれるだろう」

「よいのかや？」

その言葉にアトラは喜ぶどころか、不審な顔をメルトの背中に向けた。タダでそんなことをする男には見えない為である。

「金がありやたらからんだろ、俺から」

「……そうきなすったか」

今後たかりづらくなったことに、アトラは額に手を当て落胆した。メルトは当たり前だ、って顔をしていたが。

第8話

「じゃあ昨日の酒場で。飯食ったらすぐ出るぞ」

「分かった。昼までには向かいんす」

リュミオーネ商会の前、二人は歩きで買出しに出てきた。

アトラに手紙を渡すと、メルトは背を向け商店が並ぶ通りに向かっていく。それを眺めつつ手紙を懷に仕舞い、アトラは商会の前に居た、昨日と同じように入口に控えていた男に声を掛ける。

「もし、そのぬし様」

「はい……ああ、昨日ブレイスさんと一緒に居た——」

「アトラと申す。宝石の買い取りをやっていると聞いて来たのじゃが？」

「もちろん。……ささ、こちらへ」

男はアトラを商会の奥へと案内し、応接間の一つに連れていく。

「こちらでお待ちください。担当の者がすぐに伺いますので」

「うむ。……ああ、そうそう」

アトラは懷から手紙を取り出し、男に差し出す。

「担当の者に渡してくりやれ。鍛冶屋の紹介状じゃ」

「ブレイスさんの……確かに」

手紙を受け取り、背を向ける男が視界から消えてから、アトラは応接間に入った。

中はシンプルな彫像の机と椅子が並び、周りをおびただしい数の羊皮紙がひしめき合っている。椅子の一つに腰掛け、アトラは腰に差していた刀を机に立てかけた。

少しして、担当の商人が扉をノックしてきた。

「……失礼します」

入って来たのは金髪を短めに揃えた、壮年の男性だった。

「当商会の宝石商を任されております、オリバー・ゼルレッチと申します。ブレイス様の紹介があつた、アトラ様ですね？」

「いかにも、さっそく宝石を見てもらいたいのだが」
「分かりました」

目の前にゼルレッチが腰掛けると同時に、アトラは懷から宝石を取り出し、商人の前に置いた。

「これが件の宝石じゃ」

「……拝見させて頂きます」

宝石を手に取り、ゼルレッチは眼鏡を掛けて鑑定を始めた。

鑑定の結果を待つ間、アトラは瞑目して今後について思考し始める。

（エレンに会いに行くかのう、今日も食事の用意をするかもしれんし）

「……お待たせしました」

鑑定が終わり、眼鏡を外したゼルレッチが顔を上げたのを機に、アトラも目を開き、意識を商人に向ける。

「鑑定結果をお伝えします」

「……頼みんす」

「この宝石はとても珍しく、今では滅多に市場には流れないモノです。これをどちらで？」

（……ちよつと古すぎたかの？）

アトラは内心焦った。獣人とはいえ寿命はある。アトラの場合は獣人のカテゴリーには入らないので寿命の概念は薄いが、かなり昔に購入した宝石の出所を訪ねられる程長生きしていたとは、自分自身驚いている。だが、今はそれどころではない。

（どこから盗んできたなどと思われてはかなわぬ。誤魔化すか）

「家に長い間置いてあった宝石でありんす。なにかあればそれを売って工面してくれ、と言われておった」

「なる程、これは失礼を。……鑑定の結果、当商会ではこちらの宝石に金貨100枚の値を付けたいのですが。無論、クリスト金貨で」
（……そこまで珍しくなっていたとは）

アトラは驚きが顔に出ていないか心配になって来た。

クリスト金貨100枚もあれば、酒場で飲み放題どころか酒場を丸ごと買い取ることができる。小さな酒場なんてそれこそおつりが出る程だ。それだけの額を聞いて、アトラは値を吹っ掛けることも出来なかった。

「……それで頼む。出来れば後で両替もしてくれると助かるのじやが」

「なんでしたらお手数を掛けることになりますが、指定の枚数の貨幣をご用意しますか？」

「では金貨99枚に銀貨100枚で頼む」

それだけ聞くとゼルレッチは頭を下げ、宝石をアトラに返してから応接室を後にした。

「……昔は一カ月暮らせるだけの額で買えたのじゃがな」

今から売る宝石よりも大きなモノはまだある。それもかなりの数だ。これから価値が上がってくると思うと……。

「……将来は国でも買うかのう」

などと言った冗談も口から漏れ出てしまう。

そんな馬鹿げたことを考えてると、先程出ていった商人が貨幣の入った袋と羊皮紙を持って戻って来た。

「お待たせしました」

またアトラの向かいに腰掛け、袋と羊皮紙を置いて、羊皮紙の方を広げた。

「こちらが買い取り証明になります。サインの前に貨幣の確認をお願いします」

「うむ、では早速」

ゼルレッチの差し出してきた袋を受け取り、アトラは口を広げて中身を広げていく。

「60……70……80………確かに」

「ではこちらにサインを」

差し出されたペンと羊皮紙を受け取り、アトラは買い取り証明の内容を吟味する。

「ふむ、これで良いかや？」

確認を終えサインを書き込み、羊皮紙と宝石を商人に差し出す。ゼルレッチはそれらを受け取り、一通り見てから羊皮紙を丁寧に畳んでいく。

「結構です。今後も当商會を御贔屓に」

「確かに。では」

貨幣入りの袋を懷には仕舞えないので腰に括り、立て掛けた刀を持って立ち上がった。

「……ああ、そうだ。アトラさん」

「なにかや？」

部屋を出ようとしたアトラの背に、ゼルレッチは声を掛ける。

「メルトさんに伝言を、一か月以内にクローディアの森の方へ立ち寄る場合はまたレモンをお願いします、と」

「確かに、じゃがなぜ一か月以内なんじゃ？」

扉に掛けていた手を下ろし、アトラは中の商人に振り返る。

「一ヶ月後にティオ神聖國がこちらに遠征に来ることになりまして、もしかしたらその影響で南との行商が再開されるかもしれない為です」

「遠征？ あの國に関してそんな話は聞かんだが」

ティオ神聖國。ロックブラストのはるか南東に位置する宗教國家であり、武力としては神官兵を有しているが、遠征を行う程の活動は、宗教的観点から見てもありえないはずだ。

「おそらく悪魔信仰の影響でしょうね。人の道から外れてるとはいえ、立派な異教徒に当たりますから」

「異教徒には容赦がないとは言え、加減を知らんのう。あの國は」

「ええ、来るべき神の子の為の訓練という名目ですが、本命はそちらでしょうね」

どこも血氣盛んじやのう、と考え、アトラは再び背を向けた。

「確かに伝える。では」

「はい。お気を付けて」

その言葉を背に、アトラは応接室を後にした。

第9話

「そうですか……メルトさんはしばらく出かけられるんですね」

「うむ……じゃから今日は……」

「分かりました。わざわざありがとうございます」

馬車道の一角、香辛料を販売している商店でエレンは働いていた。この時間には家に居ないだろうと考えたアトラは、商会后にすぐ商店の建ち並ぶ馬車道に来て店を回りつつ必要な物とエレンの所在を聞こうとしたが、真っ先に立ち寄った香辛料の専門店ではエレンを見つけたのだ。

アトラはエレンに唐辛子の実を一袋注文し、袋に詰めている間にこれからの予定を伝えてから、唐辛子入りの袋を受け取り、銀貨を代わりに渡そうとする。

「……ところでアトラさん」

「ん？」

釣りの銅貨を数えながら、エレンは疑問をアトラにぶつけた。

「その唐辛子、どうするんです？」

「これかや？」

釣りを受け取る手とは反対の手に持った袋を持ち上げ、アトラは不敵に笑う。

「こいつはわたちの切り札にして……生命線じゃ」

「？」

首をかしげるエレンに背を向け、アトラは馬車道を抜けていった。

「……ま、できれば他の物が良かったのじゃがな」

袋を片手にアトラは、途中寄り道をしつつも酒場に向かっていった。例えばリンゴ。食べる度に姿形が変わるのは厄介じゃが、これほど甘美な食べ物はありません」

そう漏らして、先程購入したリンゴを大口を開けてかじる。

「うむ、うまい。……ホ口でさえ麦じゃと言つのに、わっちは唐辛子、いやになつてくるのう」

赤い髪を揺らしつつ、人混みを避けて歩いていると昨日立ち寄った酒場が見えてきた。その横にはメルトの荷馬車が横付けされている。どうやら既に来ていているらしい。

「……早いもう」

かじり終わつたりリンゴの芯を馬用の餌箱に放ると、アトラは酒場の中に入つて行く。

酒場の中は閑散としており、客はカウンターに居る銀髪の鍛冶職人が座っているだけだった。

「待たせたかの？」

「たいして、さっき注文したばかりだ」

アトラはメルトの隣に腰掛け、その反対側の席に持っていた袋を置いた。

「……それは？」

視界に映つた袋の中身に興味を覚えたのか、メルトが訪ねて来る。
「ん？　これかや？」

アトラは席に置いていた袋を手に取り、中身を少しカウンターに出した。

「唐辛子？」

「そう。正真正銘の唐辛子じゃ」
うち一つを手に取り、弄びながらアトラは説明し始める。

「本来わっちは自然に生っている何かを依り代にして姿を変えりんす。その際はわっちらの力が宿つたそれが命となり、全てなくすとわっちは死んでしまう。本来は別の物が良かったのじゃが、昔仲間嵌められてのう。難破した船から流れ着いたこれを食べさせられて気がついたらこれに決まって……ヤツミの奴め。今度会つたらただでは起きんせん！」

「とりあえず落ち着け」

ヤツミとかいう仲間の顔でも思い出したのか、激高して腰を浮か

したアトラを落ち着けさせ、メルトも唐辛子を一つ手に取る。

「どう見ても唯の唐辛子に見えるが……」

「当たり前じゃ、わっちらの力を感知できるのは同じ類の力を持つ者だけじゃ」

「そりやそうだが、こいつは精霊契約の類じゃないのか？」

精霊契約。自然界に存在する精霊と呼ばれる存在、大抵は自然現象を司る何かだが、その力と契約関係を結ぶか、力の恩恵を受けることでその一部を行使することができるようになる。かつて、ロックブラストを建国した英雄は岩石の精霊と契約を結んでいたとかないとかの話もある。

「に、近いかのう。見方をかえればわっちらも精霊の類のようなものでありんすから」

「の割にはありがたみもなさそうだな」

ヒュン。キイイイ！

「類、と言ったはずじゃが？」

「類でも所構わず刃物を抜くんじゃねえ」

いつの間に抜いたのか、刀の切っ先をメルトに当てようとし、メルトも剣を抜こうとしたが、アトラの方が抜刀速度が速く、鞘ごと受け止めるしかなかった。そもそも刀の方が刀身が反っている分、直刃の剣よりも形状的に抜刀に有利なのだが。

剣の鞘と刀の刀身で鏢迫り合いを演じていると、奥から出てきたエメラルダが二人を見るや、

「……あんたら」

その低い声に、二人の背筋に悪寒が走った。アトラの尻尾は恐怖で逆立っている。

「……ヤ、ヤバイ」

「何がじゃ？」

メルトが疑問に答えるよりも早く、エメラルダがカウンターから出てきた。身の丈程の巨大なバトルアックスを片手に持って。

「……昨日面倒事はご法度って言ったよな？」

「……た、確かに聞きんす」

近づいて来る女将に怯えつつも、二人は荷物を持ってゆつくりと後ずさった。

「女将は昔、有名な賞金稼ぎでな。聞いたことはないか？ ……首^メ切りの五月^{イザ・スライサー}つて」

「……一昔前に、狼に戻ったわうちと対等に渡り合った人間がおつたが、その賞金稼ぎにあっさり首を取られたと風の噂で聞いた。まさかこの者とは……」

「……あんた達」

斧を軽々と振り、肩に担いでエメラルダは声を低くして二人を睨みつける。その目に睨まれ、凄腕の鍛冶職人も赤き牙と呼ばれた狼の化身も、身が竦んで動きが止まってしまった。

「……その頭と胴体は、別れを済ませたのかい？」

余談だが、かつてこれを聞いた者は怯え慄き、たまたま近くに居た赤の他人でも命乞いをさせる程だとか。中には彼女を恐れた下級の神も居た程、その力は強大であり、バトルアックスも破壊の神が気まぐれに渡したものだと言う噂がある。

メルトとアトラは図らずもその噂の信憑性を確かめる結果に終わった。

第10話

「……ファアア………退屈だ」

ロックブラスト北検問所。北からの出入りを一括する唯一の検問所の警備は、検問所の数に比例してか、これでもないかという位に暇を溜め込んでいた。そもそもこの検問は基本的に北の温泉街、ミストウォールからの来客か、そこへ向かう自国民しか使わない為、温泉の利用が多くなる秋か冬にしか使われていないのだ。されど検問、常に警備を怠るわけにはいかないと人手を回してはいるが、この時期では他に仕事も無く、退屈なものと化している。

本日北検問所の警備を担当している彼も例外ではなく、警備を始めてから欠伸を繰り返すことしか行っていない。そんな退屈な一時に、異変は起きた。

「……ん？」

国から支給されたショートソードを片手に、検問所横の詰所から顔を出すと、街の方から荷馬車が暴走気味に突っ込んできたのだ。

「なっ！ 一体なんだ！？」

荷馬車には銀髪の男性と赤髪獣人の女性が乗っているが、しきりに後ろを気にしているようだ。というか……。

「あれって鍛冶屋の……一体何を怯えてるんだ？」

この街では結構名の通った男だと気付くと、何に怯えているのかと気になって荷馬車の後ろに目を向けると、視界にバトルアックスの刃が見えた。それだけで騒動の大半を理解し、検問所に声を掛ける。

「出国手続き、早目に出来るように準備しておいてください」

「はいはい、メルト・ブレイスさん達ですね。役所から聞いてますよ」

恰幅のいいおばちゃんに声を掛け終わると、詰所に引っ込んだ。それと同時に、荷馬車がものすごい勢いで突っ込んできて、急停止

するや御者台の男性が手に持った羊皮紙を検問所に投げ込むようにして差し出す。

「出国手続き！ 急いで！！」

「ぬし、まだかや！ もう追い付いてきんす！！」

女性の方は手に持った弓で矢を後ろに放っている。ものすごいスピードで。

だが相手が悪い。賞金稼ぎの中では未だに高名な首切りの五月を理由は知らないが怒らせたのだ。ただの矢どころか、特級の威力を持つ巻物スクロールでも辛うじて足止めができる程の実力を誇る彼女に、例え早くても威力の無い攻撃は焼け石に水である。

「……………むあああちいいいいなあああ！！？」

「はい終わりましたよ。手数料は——」

聞くや男性は懐からクリスト金貨を一枚取り出すと、検問所に投げて寄こしてから、荷馬車を急発進させた。

「ブレイスさん！ お釣り——」

「迷惑料だ！ 取っとけ！！」

そう言い残して、荷馬車は視界から消え去った。検問所付近に残ったのは、巨大なバトルアックスを抱えた酒場の女将エメラルダに、一枚あれば三、四ヶ月は暮らせるほどの金貨を渡されて途方に暮れている検問所のおばちゃん。そして……

「……………今日も異常なし」

と、いつものことだと思つて詰所の中で欠伸をする彼が、椅子にもたれていた。

「……………なんとか撒いたか」

「みたいじゃのう……………」

ロックブラストから数キロほど離れた草原にて、二人は荷馬車の速度を落として張り詰めていた空気を霧散させた。御者台に立っていたアトラは、手に持っていた弓を荷台に放ると、メルトの隣に腰掛けた。

「しかし、何故高名な賞金稼ぎが呑気に酒場の女将なぞ……」

「酒場の主人に惚れたらしいぞ。以来、酒場で悪さする輩はあの斧の餌食になるか、無事に謝罪を終えるか、二度と近づけない酒場になった」

「犯罪者が来ないのならば、主人も文句は言えぬか」

腰に付けていた矢筒も外し終え、同じく荷台に放ってから入れ替わりに水袋を取り出し、口を付ける。

「……俺にもくれ」

「ほれ」

水袋をメルトに渡し、アトラは荷台に潜り込んだ。

「しかしお前、弓も使えたんだな」

「昔に習いんす。刀の師匠の知り合いじゃった」

「まさか斧や槍とかも——」

「鞭に暗器、投擲武器から徒手空拳まで、一通りできんす。一番は刀じゃがの」

指折り数えて教えて来るアトラに、メルトは軽い恐怖を覚えて前を見据えた。

「その上狼の化身か、いざとなりやあの化物倒せたんじゃ——」

「それは無理じゃのう」

アトラは何処か自嘲するような声音で話を切り出してきた。

「わっちの場合は元が狼じゃから、刀を除いてどんな武器も二流どまり、あの女将はどう見ても一流な上に、持っている斧は神代の逸品。同じ類の刀があるならまだしも、狼の姿に戻っても勝てぬのがオチじゃな」

「なんとなく分かるが、何で刀だけ？」

「……それはの、ぬしよ」

アトラは腰に差したままの刀を鞘ごと抜き取り、天に掲げた。

「初めて習ったのが、刀だからじゃ。師匠と出会い、初めて刀を握り、刀を振り、火の粉を払った。どんな命も、積み重ねてきた経験には勝てはせんからのう」

「……そうか」

それだけ聞くと、メルトは口を閉ざした。アトラも話すことがないのか、横になると刀を自分の横に置いて、昼寝に入った。

荷馬車は静かに進む。数刻後にメルトがミストウォールの温泉から出る煙を見つけるまでは。

第11話

「ロックブラスト程ではないが、人が多いのう」

「時期外れだからな。秋になるにつれて、人はこの何倍にも膨れ上がるさ」

ミストウォールに着いた二人は、荷馬車を近くの厩に預けて、今晚泊まる宿に向かっていた。

「もうすぐいつも使っている宿だ。部屋が取れたらすぐ出るけど、お前は どうしてる？」

「少し散歩するかのう。いろいろ見て回りんす」

簡単な荷物を持って歩いていった二人の前に、少し古いが大きな宿が見えてきた。アトラを連れて宿に入り、メルトは宿の人間を探す。

「居ないのか……おい、誰か居ないのか？」

宿の奥に声を掛けるも、反応はない。様子がおかしいと思ったが、遅れて声が聞こえてきた。

「すみませんすみませんすみませ……ああ、メルトさん」

何処か怯えた口調で出てきた短髪で小柄な男に、メルトは手を挙げて挨拶する。

「ようキリト、相変わらず小心者だな」

「いやすみません遅れて、いつも通り一人部屋ですか？」

「いや、今日は連れが居るんだ」

そう言つて、入口の所にいたアトラを手招きする。

「てなわけで部屋は二つで頼む」

「……すみませんメルトさん、今部屋がほとんど埋まっています。そう言つてキリトは頭を下げる。

「四人部屋ならば一部屋空いているのですが……」

「いや、だから頭上げろつて」

いつものことながら、未だに小心者な宿の従業員に呆れつつ頭を

上げさせ、後ろに居る連れに問いかける。

「だそうだが、それでもいいか？」

「別にかまいません。部屋代はぬし持ちならばの」

「……汚え」

部屋代をキリトに押し付け、鍵を取りに行かせると、メルトは荷物をアトラに押し付けた。

「じゃあ俺の荷物運んどいてくれ。重けりゃキリトにでも押しつけろ」

「……分かりんす。はよ行け」

しっしっ、と手を振り追い払う仕草をするアトラを尻目に、メルトは宿を出ていった。

「……ホウ、景色は良いのう」

「ありがとう、ございます」

二人分の荷物を抱えたキリトの案内で訪れた部屋は、三階の南寄り、日当たりも良く、街の外の景色を一望できた。畳張りの座敷部屋で、アトラは寛ぎながら荷物を置いている従業員を眺めている。

体力がないのか疲労困憊とした様子でキリトが出ていくと、アトラは外を眺めようと窓辺に寄った。

「……時期外れだからか、景色が青すぎるのう」

紅葉が彩る景色の方が好みなアトラにとって、この景色は若すぎると考えたのか、刀と手持ちの貨幣が入った袋を持つと、部屋を出ていった。

「……居るか、店主」

「おお、待ったぞ」

寂れた街道の奥、古びた骨董屋に訪れたメルトは、呼び出した人間である店主ブレアに店の奥から声を掛けられた。店に入り、奥の方を覗くと、白髪の老人が古びた羊皮紙を両腕に抱えて出てこようとしていた。

「いやスマンの、急に呼びつけて」

「別にかまわんが……要件はこれか」

店内にあったテーブルの上に載せられた羊皮紙の山を眺めて、メルトは溜め息を吐く。

「随分と集めたな」

「掻き集めるのに苦労したわい。……古代語で記された巻物スクロールをな」

巻物には二種類存在する。現代語で記された巻物と、今は廃れた古代語で記された巻物と。現代語で記されたものは誰でも使用できるが、現代語で巻物が記されるようになってから、大した威力を持つモノはポピュラーなファイヤーボールやサラマンドラ位で、他は補助や治癒、はたまた毛生え効果を与えるモノや明かりを灯すモノまで、大抵のモノは役に立たない。だが古代語で記された巻物は違う。古代語を理解していなければならぬが、理解していればその力を行使できる。しかもその力は現代語のモノとは異なり、それこそ一枚あれば世界をも塗り替えてしまう程のモノが混じっているときがあり、古代語の巻物を軍事利用しようとする国は後を絶たない。「とりあえずこれで全部か。すまんが翻訳を頼めぬか？」

「またか。俺は鍛冶屋であって、学者ではないのだがな」

鍛冶の師匠から古代語を習ったメルトにとって、巻物の古代語を翻訳することは容易いのだが、如何せん自分の職とかけ離れているからか、あまり乗り気がしていない。

「まあそう固いこと言うな。いつも通り気に入った巻物をいくつか報酬にやるから、全部翻訳してくれ」

「……分かった。丁度古代語を知ってそうな奴が居候してるから、いざとなればそいつにも手伝わせる」

メルトの脳裏には、赤髪の狼の化身が映っている。三百年以上生きていであろうアトラならば、古代語を読めるかもしれないと考えたのだ。

「ではその者にも巻物をやつといってくれ。……言っておくが、百枚あるから報酬は十枚までじゃぞ」

「分かつてる。切り上げで十枚につき一枚の報酬だろ。適当な袋に入れといてくれ」

老人が袋を取りに行った後、メルトは店内の骨董品を眺めていたが、ふと外を見ると、向かいの武器屋に見覚えのある後ろ姿をした獣人の女性が入っていくのが見えた。

「ちよつと纏めといてくれ。連れが見えたから呼んでくる」

「さっき言ってた居候か？　じゃあ挨拶したいから紹介してくれ」

「はいよ」

そう言い残してメルトは店の外に出た。

第11話（後書き）

次話から（主人公側の）キャラが一通り揃います。なのでエピソード掲載（三月掲載予定）までを期限にアンケートをとります。一期以降の掲載（一部改稿の予定）を希望するか否かで、希望者が過半数の場合はブログ掲載と並行して連載を続けます。アンケートは感想掲示板の一言欄に記載してください。では

第12話

カランコロン。

ミストウォールにある武具店の一つ、『タイクーン』。

異国の意味で偉そうな名前の上、店主も頑固と来てるが、普通ではまずお目に掛かれない武器、防具を専門に取り扱っている店の為、たまに冒険者などが訪れている。

「……ほう」

その店に入り、アトラはまず感心した。

内装はボロボロ、天井の端々には蜘蛛の巣が掛かっている上に店番をしている店主だろう男は手元にある本から顔を上げない。なのにもかかわらず、周りに並べられている武器、鎧や壁に立てかけられた盾などには埃一つ積もっていない。並んでいる武器も珍しいものばかりで、アトラは店の端から端まで見渡した。

カランコロン。

ふと棚の一つに目が向いたら、後ろで扉の開く音がし、アトラは後ろを振り返った。

「用事は終わったのかや？」

「後は荷物纏めるだけだ。少し時間が掛かるがな」

メルトはアトラに声を掛けると、奥へと進み店主らしき男に歩み寄り、軽く頭を下げる。

「お久しぶりです。ロストさん」

「……元氣そうじゃないか。メル坊」

「もう坊やはやめて欲しいんですがね」

軽く苦笑いを浮かべながら、メルトは顔を上げた。それでもロストと呼ばれた男は、顔を上げるどころか一瞥すらしなかったが。

「少し、商品を見せてもらってもいいかや？」

「……好きにしな」

それを聞いて、アトラは並べられている剣を一本一本見て回った。

メルトもそれに付き合うように後ろをついていく。

「しかし色々並んだら？」

「この品揃えは昔からこうだからな。……ん？」

メルトの眼が、一本の剣で止まった。剣、と言っても形状は直刃ではなく、何処となく刀を連想させるような反りが入っている片刃の剣だが、刀と違い、柄拵えが直刃の剣と同じような縦長の形状をしている。まるで剣の柄に刀の刀身を無理やり組み込んだかのよう。だがそれだけではなく、刀に似た剣から何か、他とは違う何かが漏れ出しているような。そんな感覚が押し寄せて来るように感じ取れた。

「……どうしたのかや？」

「いや、この剣……」

アトラの問いに応えず、メルトはその剣を手にとった。柄拵えは黒く、刀身も黒く染まっている。

「黒銀、じゃないな。これは――」

「挨拶くらいしな。シャーリー」

店主の声が店に響いた途端、

「うわっ!？」

「なんじゃ!？」

閃光が店内を包みこみ、メルトとアトラは咄嗟に目を塞いだ。その閃光に怯んで、メルトは剣を手放してしまう。

2人が薄眼を開けて様子を見ると、そこには黒いワンピースの上に厚手の黒ジャケットを身につけている、十代半ばくらいの外見の少女が居た。肩甲骨くらいまでの黒髪の少女は、無表情な顔を二人に向けて来る。

「……シャーリー、以後よろしく」

軽く手を挙げて挨拶してくるシャーリーに驚き、アトラは呆然とし、メルトはロストに詰め寄った。

「ロストさん! これは――」

「そいつはシャーリー」

メルトの声を遮り、ロストは立ち上がってシャーリーと名乗った少女に寄る。

「見ての通り人に化ける魔剣だな、こいつは」

「……いや、逆なんだけど――」

「……魔剣型の悪魔、じゃろ？」

その言葉に、店に居た全員がアトラの方を向く。

「前に似たようなのを見たことがあります。悪魔契約によって生み出された偶然の産物。人間という仮の姿を持つ、魔剣型の悪魔じゃる。おぬしは」

「……そう」

シャーリーは少し俯きがちに、アトラの言葉を肯定した。無表情のままだが。

「……とりあえず質問なんだが」

少し遠慮がちに、メルトが口を開いた。今度はメルトに視線が集まる。

「悪魔契約によって生み出されたって、こいつが悪魔契約かまして悪魔になったんじゃないのか？」

「……違う」

シャーリーが口を開き、その質問に応える。

「……気がついた時には戦場に居た。生まれた理由も、存在する理由も分からないまま、私は剣の姿で戦場に居た。周りの人間達は私を使って、互いを殺し合って、ただ死体を生み出していった。……私にはどうすることもできなかった」

話し終えると、シャーリーは口を噤んだ。メルトはアトラに目を向けるが、アトラは黙って、頷きを返してくる。

「間違いじゃなからう。わっちが見たものも、同じことを言っていたからのう」

「……そうか」

メルトは頭を掻くと、天井を見上げた。

「……どう反応したものやら」

「悪魔じゃから、怯えればよいのではないかや」

などと、アトラがメルトをからかうと、

「……ガオ」

横からシャーリーが無表情のまま、メルトに向けて両手を挙げ、
「今から襲いかかります」とかいう仕草を見せてくる。

「……一応聞くが何のつもりだ？」

「……場を和ませようかと」

などと返してくるシャーリーに呆れつつ、ふと視界の端にアトラとロストが話し込んでるのを見つける。話し終わったのか、アトラがメルトとシャーリーに向けて言い放った。

「シャーリーとかゆったか、今からぬしはわっちの剣となった」

「………」

「………」

いきなりな展開に啞然としたが、二人はアトラに同時に問いかけた。

「……いくらで？」

あまりの展開に、ぶっ飛んだ問い掛けしかできない二人であった。

第13話

「……連れは一人じゃと思ったのだが」

「……ちよつとな」

あの後、ロストに別れを告げ、メルトはアトラとシャーリーを引き連れてブレアの待つ骨董屋に戻って来たのだ。ちなみにシャーリーの値段は人一人分の一生の生活費（食事代のみ三人分）、要するにアトラが養うということで話が纏まったらしい。

「……ボロイ」

「これこれ正直に言うんじゃありません」

などと言い合う二人を無視して、メルトはブレアから荷物を受け取った。

「とりあえず、獣人もどきがアトラ、さっき言ってた奴な。あと黒いのがシャーリー。アトラが買ってきた魔剣もどき」

「……それ、人の紹介か？　びっくり生物の紹介か？」

呆れながらブレアは店の奥へと引っ込んでいった。メルトはそれを見て溜め息を吐くと、後ろを振り返り声を掛ける。

「おい、帰る……ぞ……」

気が付いた時には既に遅かった。メルトの首筋には刀の切っ先が光り、対称に周囲には影がうねりつつ刃の様に尖り、足元を囲んでいる。どちらも隙あらば、メルトを差し貫こうとしているかの様に。「誰が獣人もどきじゃと？」

「あまり自分のことを知られたくない。……黙れ」

この後の状況を見た第三者の感想。……女は敵に回すもんじゃない。

「……てて」

深夜。古物商から宿の部屋に戻ったメルト達は、シャーリーの宿泊をキリトに伝えてから夕食を取り、各々過ごしてから就寝したの

だが（空き部屋の関係上、シャーリーも同室である）、二人に痛めつけられた身体が痛み、目を覚ましたのである。

メルトは立ち上がり、部屋の窓に近寄ると、窓枠に腰掛け、三日月の浮かぶ夜空を見上げた。

「……やな夜だ」

「わっちは良いと思うがの」

部屋の方を向くと、そこには浴衣に身を包んだアトラが布団から出て、その場に佇んでいた。おそらくメルトの起き上がる音で気づいたのだろう、彼女は窓辺に近寄り、近くに置いてあった座敷に腰掛ける。

「夜空には星と月が散りばめられ、静かな風が部屋に吹き抜ける。獣は吠えず、虫は微かだが歌っている。良い夜ではないかや？」

「……そんな夜に、俺は死体を見た」

その一言により、吹き抜ける風が少し肌寒く感じてしまい、アトラは思わず腕を抱いた。

メルトは語る。ただ淡々と、夜空に顔を向けて。

「今日の様な夜に、一人の男が悪魔契約に手を出した。ロックブラストは昼の様に燃え盛り、辺りには死体が散りばめられていた。ただ、街の衛兵が出て来るのが早く、すぐに鎮圧されたから、被害は一人を除いたとある一家のみで済んだ」

「なるほど、その生き残りが、ぬしかや？」

「……ああ」

2人は星の海に浮かぶ月を眺めている。周りを邪魔するものは何もない。

「何故その男は、悪魔契約に手を出したのかのう」

「それは誰にも分からない。その男は家族も含めて周りから好かれていたからな。だから家族は嫌われてはいないらしい。だが俺は――」

「恐怖している、かや？」

沈黙。だがこの場では、肯定の返事にしかない。

「あの青髪の娘が、悪魔契約に手を出すと思うのかや？」

「……出すかどうか分からないから、拒絶するしかないだろ」

その言葉が、何処か震えている様にアトラの耳には聞こえ、震えた。

「知らないのでは、ないのかや？」

「……気づいてたくせに、やな狼だな」

それだけ言うと、メルトは窓辺から離れて、布団へと戻っていった。

「……やれやれ」

アトラは立ち上がると、近くの壁に立てかけてあった二本の刀剣のうち、借りている刀の方を手にとると鞘から引き抜き、刀身に月の光が当たるように傾けた。

「やはり良い刀じゃのう。……だが、脆い」

メルトが腰掛けていたのとは逆の方の窓枠に腰掛け、刃を鞘に戻した。

「芯が脆く、それを肉付きで無理やり押し込めた刃、鰐迫り合いは向かぬのう」

アトラの耳には一人分の寝息が聞こえている。メルトはもう寝ているはずだから……。

「起きておるのじゃろ？ ……シャーリー」

「……うん」

その返事と共に、シャーリーは布団から身を持ち出した。

「最初から聞いておったんじゃろ？ なら、あの話は聞かなかったことにしておくように」

「分かった。……だけいいの？ あれ」

指差す先にあるのは、メルトが潜っている布団である。アトラはシャーリーの方を向き、静かに顔を振った。

「今は良い。……それに、ああいう手合いは切っ掛け一つで変わるもんじゃ。下手に掻き回す方が悪化の一途を辿りかねん」

「……そりゃそうだ」

それだけ言うと、シャーリーは布団へと戻っていく。アトラは再び夜空を眺めようと顔を外に向けようとするが、

「……ああそうそう」

「……ん？ なんじゃ？」

シャーリーに声を掛けられた為、顔を屋内へと向けた。人の姿を模している悪魔は布団から顔だけを出し、

「何があっても、私は貴方の味方だから。……纏いし影に誓って」

それだけ言うと、アトラとは逆を向いてしまった。

「……そうかや」

アトラは刀を元有った壁に戻し、布団へと潜り込んだ。

願わくば、誰もが良い夢を見れるようにと祈りながら、狼は目を閉じる。

第13話（後書き）

もうすぐ年明けですが、来年もよろしくお願いいたします。

第14話

「……今日はどうするの？」

「帰りんす。ロックブラストという街を知つとるかや？」

朝。目を覚ました三人は宿から出された食事に舌鼓を打っていた。

「……あの行商人泣かせの街？」

「確かに換金とかの融通は利きづらいが、堂々と言うか、普通」

元々ここでの用事は巻物の翻訳を頼まれたからであり、翻訳する巻物を受け取ればもう用はない。後は街に戻って翻訳をすればいいのだから。

「ところで二人共、古代語は読めるか？」

食事を終え、食休めをしながら、メルトは二人に問いかけた。

「読めりんす。シャーリーはどうかや？」

「……どんな文字？」

メルトは巻物を纏めてある荷物から一つだけ抜き取ると、広げてシャーリーに突き付けた。

「……読めない。一世代前なら読めるけど、これ、それより前の言語でしょ？」

「三世代前の言語じゃのう。これはわっちでもうる覚えでありんす」

「二世代前までののが分かるなら十分だ。俺が教わったのは三世代前と四世代前だけだからな。見事に間が抜けてるんだよ」

古代語は一つだけではない。今使われている言語の前に使われていたのが『一世代前の古代語』、それから順に『二世代前』、『三世代前』、『四世代前』と現代語からかけ離れていき、もっとも古い言語とされているのが『五世代前』の古代語である。そして巻物は、古い世代で書かれているものほど、強力になっている。いや、時が経つにつれて巻物が弱体化していつている。その原因は未だに究明されていない。

「何故一世代前と二世代前が抜けてるのかや？」

「大体翻訳を任されるのが三世代前と四世代前なんだよ。それ以外のものはあの爺さんの仲間や師匠が翻訳していたから、集めた数の多い二つの世代を中心に教わって、その半ばで師匠が死んだんだよ。実際、一世代前なんて『稲光』丸暗記してるだけだしな」

話し終わると、メルトは手に持っていた巻物を荷物に戻して立ち上がった。

「……さて、そろそろ帰る準備するか」

「……いいけど、『稲光』って持つてる巻物のこと？」

「そういえば一回しか見てないの」

「……そう何度も使う機会に恵まれてたまるか」

三人はいそいそと荷物を纏めると、一晚寝た部屋を後にした。

「……揺れる」

「仕方ないだろ。誰が零したのか、石炭ばら撒かれて砂利道になってるんだから」

「二人共口を閉じときんす。舌を噛む」

帰りは行きと違い、何故か石炭が路上に散らばり、進む度に荷馬車の車輪が石炭を乗り上げて揺れ出すのだ。御者台に居るメルトだけでなく、荷台に乗っているアトラとシャーリーも揺れに耐えきれず、何かにしがみ付いていないと路上に弾き出されてしまう。

そんな状態で帰るはめになった三人は、舌を噛まない為にも口数が段々となくなっているのも仕方がない。

ロックブラストとミストウォールの間。揺れる荷馬車の中、アトラは考えていた。

街に居るエレンのことでも、転がっている石炭のことでもなく、先程から風に乗って漂っている焦げ臭い匂いに。

（一体何なのじゃ？ 近くの森が燃えている訳ではないのに、さっきから漂っているこの匂いは）

荷馬車の淵に片腕でしがみ付きつつ、もう一方の腕は刀の鞘に伸

びていた。

（風向きは…… ロックブラストの方かや。しかし一体……）

「のう、ぬしよ」

「何だ？ 舌噛むぞ」

揺れる荷台から馬を繰りつつ、メルトは背中越しに振り向いた。

「少し急げぬかや？ 何か嫌な予感がしんす」

「嫌な予感？」

そう呟くとメルトは前を向いたが、同じ様に匂いを感じたのか肩に力が入っているのが見える。

「……何だ、この匂い？」

「分からぬ。ロックブラストの方から吹く風に乗っているのは分かりんすが——」

「……止まって」

シャーリーの一言で、メルトは馬車を止めた。何事かと思った二人は視線を声の主に向ける。

「どうした？」

「……悪魔の気配がする。この先で」

「……本当かや？」

メルトは御者台から飛び降りると、荷台の底にある小物入れから望遠鏡を取り、路上近くの高い木に近寄って登り出した。ある程度登ると太目の枝に腰掛け、髪を払うと望遠鏡を街の方に向けて覗きこんだ。

「……煙が上つてる。街の方からだ。………ん？」

望遠鏡に鳥の影が映った。いや、それにしても大きすぎる。そしてその影は——

「……こっちに向かって来ている！」

気づくやメルトは望遠鏡を手放し、腰掛けていた木の枝から飛び降りた。

「何か来るぞ！ 構えろ！！」

「！？」

「何じゃと!？」

既に降りていた二人はそれぞれ戦闘準備に入る。アトラは刀を鞘から抜き、シャーリーは馬の手綱を握って路上から離れた。

「一体何が来るのかや!？」

「分からん。鳥みたいだが——」

「悪魔契約の悪魔、間違いない!」

木の陰からシャーリーの声が聞こえてくる。

「悪魔か……やっかいだな」

「いざとなれば狼に戻る。とにかく——」

強い風が吹き、空から舞い降りたのは黒鳥、いや鳥型の異形だった。まるで人間を黒く染め、無理やり膨らませて鳥型にした様な……。

「とにかく生き残ることだけを考えときんす!!」

その言葉と共に、メルトは鞘から剣を抜いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1101x/>

鍛冶屋の日々

2012年1月7日18時18分発行